



くすりと健康

● 神戸市薬剤師会 ●

入浴剤について

日本では、古来より天然の温泉や薬用植物を病気やけがの治療、健康の保持増進にと役立ててきました。明治時代には、種々の生薬を配合して布袋に入れ、煎出^だして用いる商品が作られています。その後、温泉地に行かなくても、家庭で簡単に応用できないかという考え方から、当初は天然の温泉成分を乾燥、粉末化したものから始まり、昭和初期には無機塩類入浴剤が開発され、発売されました。今回は、入浴剤の代表的な成分の効果とそのメカニズムについて紹介します。

■ 無機塩類型入浴剤

塩類が皮膚の表面のタンパク質と結合して膜を形成し、この膜が体の熱の放散を防ぐので、入浴後の保温効果が高く、湯冷めしにくくなります。市販されているものの多くは、

このタイプです。

■ 炭酸ガス系入浴剤

湯に溶けた炭酸ガスは皮膚吸収され、直接血管の筋肉へ働きかけて血管を広げ、血流量が増します。このため、新陳代謝が促進され、疲れや痛みなどが回復します。また、炭酸ガスは体外へ出されますので、体内に蓄積することはありません。

■ 薬用植物系入浴剤

生薬の種類によって異なりますが、生薬に含まれる化学成分の働きと、独特な香りから成り立っています。

■ 酵素系入浴剤

毛穴や皮膚の溝の中に入り込んだチリやほこりが皮膚表面で絡まった落ちにくい汚れを、酵素が作用して小さくしたり、別の形に変えたりして洗い流しやすくなります。その結果、入浴後は清潔で滑らかな使用感です。

■ 清涼剤系入浴剤

夏の入浴を快適にするためのもので、主にメントールを配合して冷感

を付与させたものや、入浴後の肌をサッパリさせるものがあります。また、お湯の色は青色を基調にしたものが多く、視覚的にも爽快感を付与しています。

■ スキンケア系入浴剤

保湿成分が入浴中に皮膚に吸着浸透し、スキンケアを行います。特に冬の乾燥時は入浴後過度に角質層中の水分が失われるため、入浴剤によるスキンケアが重要となります。

現在、医薬部外品として厚生労働省の承認許可を得て販売されている入浴剤は、問題となるような皮膚刺激性はありませんが、ごくまれにアレルギー症状を示す人がいますので、その場合は使用を中止してください。

また、子どもさんなどが入浴剤を溶かした湯を誤って飲んでしまった場合でも、商品そのものをなめたりした場合でも、少量なら問題ありませんが、注意してください。